

特254

838

位

山

始



3
7

特 254
838

序

位山は往古より飛驒の名山として宇内に名を得たるもの、世上位山を或は乗鞍嶽といひ、或は所在を信濃とするものなどあるも何れも渺たる憶説にすぎず。今之を考古學上より見るも、史實交通の上より見るも、將又古文學詩歌の上より見るも、我が宮村に現存する位山なる一と儼たる事實なり。

本村教育會に於ては、豫々位山の調査研究を續行し來りたるが、本年郷土展覽會を催し、**冊誌「宮村紀要」**を刊行するに當り、更に數回に亘る實地踏査をなせり。偶々位山山

頂に於ける巨石構築の跡、祝部土器の發掘等、愈々聖山位山を考證するに足る資料の發見となり、今や位山は獨り郷土のみならず、汎く我が國文化史の上よりも重要な觀點に置かるゝに至れり。茲に宮村紀要刊行と共に、その位山の部を特に抜抄して、別刊「位山」を單行する所以なり。





目次

一、概説……………一
二、位山イチキ原始林……………三
三、笏木献進……………八
四、位山街道……………二一
五、位山神社……………三三
六、位山の牧場とスキー場……………四四
七、位山登山並に巨石文化遺蹟……………五六
八、位山の傳説……………三〇
九、位山と文學……………三五

位山

一、概説



宮盆地よ見りたる位山

名山位山は大野郡宮村山之口村久々野村の三ヶ村に跨つてゐて、北緯百三十度二分六・一秒、東經百三十七度十二分十一秒の地點に位置し、海拔一五二九米で傾斜度の非常にゆるやかな山である。此の位山は、飛驒山脈乗鞍嶽より分れて西に進み日影平、六方山を起し、途中美女峠・宮峠を経て更に南西に走る位山山脈の主峯である。其東方久々野村境の船山と相對し、其の間に位山峠をつくつてゐる。此の位山峠は往古の官道位山街道である。位山の尾は東北になだらかに傾斜して、裾は太奈山（一二三三米）となり、尙下つて荊安峠（八八五米）となる。北斜面の溪水は餅谷川常泉寺川となつて宮川に注ぎ、南斜面の溪水は山之口川、無數河川となつて益田川に注ぐ。

地質は殆ど石英斑岩であるが、その東北の山腹には、美女峠方面から輝石安山岩が延びて來てゐる。

此の山は凡そ飛驒の中央に在つて、南美濃國界へ凡そ十六里、北越中國界へ凡そ十八里、東信濃國界へ凡そ十一里、西美濃國界へ凡そ十里で、高山からは三里餘、古木鬱蒼として太古の趣がある。その山容悠然として而も威儀があり、嶺は古より彌高の峯とも言はれてゐる。僧堯惠が北國紀行に、

梢吹く嵐もたかき位山檜原が下にかゝる白雲

と詠じてゐる。

位山は舊名をくら山ともいひ、又愛寶山ともいつてゐたが、國名風土記の記載や口碑によると、位山の名は古くからあつたことが知られる。又靈山として詩歌に詠まれ、殊に全山櫟の木が多くこれを御笏の御料として古來朝廷に献上してきた。

位山は元飛驒一之宮水無神社の社領であつたが、戰國時代の末にその所有を離れた。

位山の過半は宮村の地籍に屬し、現在では山之口村に屬する分は殆ど國有林で、宮村分は明治以降度々の移管によつて、大抵宮村々有林となつて居る。山之口村に屬する位山峠一帶の土地は、一位の原始林で、昭和二年三月天然記念物に指定せられた。

二、位山イチキ原始林

岐阜縣史蹟名勝天然記念物調査報告書抄（波磨實太郎）

所在地 岐阜縣大野郡山之口村字位山（國有林）

指定面積 八拾九町六畝二十八步（昭和二年四月八日史蹟名勝天然記念物保存要目植物部第二條により内務大臣之れを指定す。）

附記 位山イチキ原始林は大正七年學術參考保護林と定められたもので、現在高山營林署で管轄してゐる。此保護林は三十林班に相當するものであつて、更に左の八小班に分れる。

ろ 一町九段八畝十步
は 八町三段六畝十一步
に 三十町七段六畝十二步
ほ 十七町四段四畝二十三步
へ 八町二段八畝二十四步
と 十九町六段四畝十七步

ち 二町五段七畝二十一步
り 十一町一段八畝四步

總計 百町二段五畝二步

即ち總面積は百町二段五畝二步である。然し(リ)小班十一町一段八畝四步は記載漏れの爲め、後に加へられたものである。指定面積は八十九町六畝二十八步であるが、學術參考保護林として、既に百町二段五畝二步を設定してあるから、従つて指定地としては、百町二段五畝二步とするのが至當である。

指定原始林は、位山峠石碑のある所から宮村無數河二軒家(人家二軒あり千五十米)の村界溪谷に至る間約二十町、東は船山の鬱蒼とした國有林、西は同様の國有林及縣有林の間に介在してゐる部分で、土地は殆んど平坦である。従つて字青木平の名がある。位山道は原始林の西部を限つて流れる溪谷に近く沿つて、宮村無數河二軒家に通じる。

位山道を二軒家から位山峠の方に向つて通過する時見た原生林の大略を述べてみよう。
林樹としては ヒノキ、アスナロ、ヒメコマツ、サハラ、スギ、アカマツ、モミ、ブナ、クリ、クロベ、

トチ、ミヅメ、ホウノキ、ミヅキ、ヤマハンノキ、ウリハダカヘデ、カツラ、ハリギリ、イタヤカヘデ、ヤマモミヂ、ミヅナラ、ウハミヅザクラ、ヤマナシ、カンボク、ガマツミ、ヤマウルシ、アヅキナシ、

ウラジロノキ、イチキ、ウリカヘデ、サハグルミ、リヤウブ、コシアブラ、ハウチハカヘデ等がある。樹幹にはシノブ、ホテイインダ、ミヤマノキシノブ、地衣蘚苔類が附着し、纏繞植物が絡まつてゐる。

是等林樹が繁茂して密林を成し、樹下は晝尙暗く、樹蔭には身長程もあるネマガリダケ非常に多く、其他ホト、ギス、ヤブレガサ、サハギク、シヨマの種類等、草本類や、十文字シダ、ヤマソテツ、フジシタ、ヤマドリゼンマイのやうな羊齒類其他蘚苔類がある。

林樹中最も多いのはヒノキ、ヒバ、トチ、ヒメコマツ、サハラ等で、イチキは少ない。イチキは林の中、彼處此處に見えるが、宮村に接近した林中には、稍々多くあるのが見受けられた。高山營林署の調査によると、保護林内のイチキは樹齡八十年乃至百五十年で、樹の總數は八百三十本を數へると言ふ。

一位は又アララギ、オソコ、スハウノキとも言つて、一位科に屬する喬木で、高さ六十尺直徑四尺にも達するものがある。位山地方では、山の南に面する方面には殆んどなく、常に北面の陰地に自生する。原始林中では、他樹のために被はれて、殆ど日光の入らない樹の陰によく生育してゐる。生長は非常に遅くて、樹幹の下部からは多數の枝を出し、太さの割合に高くない。理學士本田正次氏の調査によると、周圍五尺内外のものが最も多いと言

はれる。本員の見たのは、太いもので目通りの周囲三尺、高さ約四間のもので、多くは之れ以下である。

位山の地籍に就いては或人は大日本帝國陸軍測量部に於て發行した地圖に於けるやうに、宮村にあると言ひ、又或人は位山峠が山之口村にある事によつて、位山は山之口村にあると、又或人は信州境なる乗鞍山を指すのだと言ふ。然し本員は、道中位山を眺めて詠まれた古歌により、又古來御笏を献上したのは水無神社の神官又は飛驒の國司であつて、何れも水無神社の鎮座まします。宮村又は高山に近く、しかも昔よりイチキの多く生ずる位山より其木を得て笏に作つて献上された事は、理の見やすいことで、不便利な遠い乗鞍山よりわざ／＼此木を得られたとも考へられず、又一位の分布上から見ても、又今日の久々野村、宮村、山之口村は古くは位山村の一村であつて、後三村に分れた等、種々土地の様子などを考へて、是等を綜合する時、位山なるものは陸軍測量部に於て發行してゐる地圖によつて示すやうに、宮村の位山を主とし、尙ほ山之口村、久々野村に迄迫つてゐるものと思考する。此の位山の位置を確實に定めて置くことは、歴史上から見て最も大切なことで、又位山を指定する上についても大關係があるのである。

イチキは我國に於ては、樺太、千島、朝鮮、北海道、本州の北緯三十四度に及び、又稀に四國、九州

にも生じる。岐阜縣に於ては位山國有林に多く自生して、之を中心として彼處此處に生ずるけれども、其の數は至つて少ない。木材は諸器具、彫刻用、裝飾用の建築材として用ひられ、又庭園樹として栽植するために次第に其の數を減少し、近時は乗鞍山麓の民有林から出るものや、移植したものを使用するやうになつた。大陸では黒龍江地方を経てオホーツク地方に分布してゐる。

宮村位山は大部分が村有林であつて、施業案に基いて植伐を實行しつゝある。その爲に原生林といふものはないけれども、一位は村有林内に於ては絶對禁伐として保存してゐる。字藏柱八十九町五段歩の村有林は一位の生育に適し、比較的自然的林相を具有してゐる。

飛州殊に宮村、山之口村では、多く人家の庭園、塙等にイチキを植え、又神社佛閣の境内にも植えてゐるのを見受ける。

宮村役場では、種子を蒔き、苗を仕立て、居る。又小黒川御料林内に於ては之を試植して居ると言ふ。



位山頂上林相

指定の理由 位山のイチキは我國上古から近世に至るまで、この樹を用ひて笏を作り、朝廷に献上したことに依て有名なものであり、加へるに此イチキの生ずる森林は、史蹟名勝天然記念物保存法要目植物部第二條に該當し、代表的の原始林であるので、學術上研究の資料となり、且つ特殊の風景を形づくつてゐるばかりでなく、何れも建國當時より存在するものなので、歴史上尤も大切なものに屬する。であればこそ内務省から指定されたものであると思考する。(以上波磨氏調査報告書抄)

三、笏木 献上

平治元年の献上 平治元年に、飛州一宮神主大江某から、位山一位の御笏一對と、御衣桁を謹製して、朝廷に献上した處、殊の外叡感あつて御悦賞淺からずとあり、大納言からの返翰(現在は寫)と稱する古文書と、其の極書とが現存して居る。

貴札遂拜見候、此度位山櫟木御笏一對並御衣桁被爲獻、殊外叡覽之處、御悦賞不淺、宜神妙
叡慮蒙 候以上

平治元年四月

大納言

飛州一宮

大江參議

(水無神社文書)

この本書といふのは、古くなり、大分蝕み読み難く成つてゐたが、明治の末か大正の初め頃に、他へ持ち出されたものらしい。

宮村往還寺の過去帳寛政十二年九月二十一日の記事に左の事が書かれてゐる。

延久四年九月大江大臣橋俊里公人皇六十七代三條院御胤當國一之宮水無神社神職に被補任代々當國居住七十八代二條院御宇平治元卯年三月使節内木助左衛門を以て笏木献上仕候處、叡慮不淺御悦之由、惠真大納言中臣連宣卿(鳥羽院皇子)叡慮の趣、同月十八日奉書頂戴仕今に往還寺に傳來仕候。

右の記事は往還寺から出した笏木献上の由緒書中の一項であるが、之に依ると大江參議の使節となつて上洛したらしい事が考へられるので、或點までこの時の笏木献上の事實を信用する事が出来るわけである。頂戴した奉書は往還寺にあつたものが、後水無神社の方に移つたと考へられもする。

國司の献上 姉小路家綱の献上。水無神社奉仕檀越、位山の條に、建武の御代に、飛驒國司姉小路家綱卿より、一宮神領位山の一位を御笏の御料として後醍醐天皇に献上された趣が記されてある。今水無神社寶物中に「後醍醐天皇御下賜の御笏、姉小路家綱卿奉納」

と傳へるものがある。
姉小路基綱の獻上。家綱の孫基綱から、三條西實隆の許に笏木を贈進し、朝廷に傳獻を請うた。

この時の和歌に（雪玉和歌集）

位山峯近きまで我がこえし道をば君が手にごりて見よ

實隆大納言

返し一坂はこへのこしてん位山老いては進む道もくるしき

基綱中納言

とある姉小路濟繼の獻上。又基綱の子濟繼は永正五年三月關白尙經へ、位山の櫨の木を御笏の料に獻じてゐる。（飛騨編年史要）

元和年度の獻進 千光寺よりの獻上。永祿元龜の頃、一宮神主、一宮民部小輔長綱の嫡男國綱が、村内に山下城を築いて神領を侵し、三木自綱と縁を結んで三木刑部太夫國綱と名を改め（後三澤）専ら武門に入つてゐたが、天正十三年八月金森長近の飛騨平定の時、敗死して、水無神社の社領は全く神社を離れて悉く金森氏の有に歸した。そこで神社としては大宮司も置かれず、僅かに袈裟山千光寺の兼攝別當によつて祭祀せられてゐた。従つて御笏木獻進も、別當である千光寺（住職玄海）の名によつて行はれ、元和二年傳奏廣橋大納言兼勝を経て獻上されたのである。之に關する下賜の女房奉書を次にかゝぐ。

ひたのくにせん光寺より御しやくのきまいり候。きごくに思しめし候よし仰候ご申事に候。このよしよく御仰候ごつたへられ候べく候かしく。

ひろはし大納言ごのへ

女房奉書以下の古文書は、享和から文化の交に、其影寫を残し、長谷川郡代の後書以上を切りとつて千光寺に移され、今も同時に所藏されてある。

その後、金森宗和が元和三年の春に右大臣左大將正二位近衛信尋公へ笏木を進上した。宗和はその時同時に、日頃笏木を求めてゐた鳥丸家權大納言正二位光廣にも進上してゐる。

参考 大日本史料第十二編三二八、言緒綱記及益田郡川西村都築與七郎氏古文書・岡村利平先生研究物

〔備考〕

言緒綱記

二月一日 丁酉 天晴

一、院参仕る、次に近衛殿へ参、位山櫨の木笏可造由にて被下る

都築氏古文書

やまひにしつみ侍ける頃、金森入道宗和、飛騨國位山の一位の木をきりて、陽明へ奉りしついで、予にも投せられけり。年ころもとめ

しかどたよりなくてすくせしまよ、とりもあへず筋につくらはやとおもふこころさしのうれしさに、ことをなかくし、手のまひ、あしのふむをしらぬばかりなん、よりにてこの歌を右府公へも御めにかげや。
(右府公は近衛信暉公を指す)

いく坂もまたこえのこす位山のほらん事も命なりける

光 廣

元祿寛政年間の献上

これは寄贈した人も其の年代も不明であるが、正親町亞相へ位山の一位木を寄贈した人がある。

越後行囊抄に、

近き代ある人のもとに、正親町の亞相、位山のいちゐの木を笏の料にごてこひ給ふ。
をくりまいらすごて、

のぼれなを位の山にいや高く生ひにける木のおなじ名までも

返しここの葉を志をりごはして位山生ひにける木の名にのぼらん
正親町前大納言

とある。行囊抄は江間氏親といふ人が著述し、元祿九年に自序を書いて居る。

(岡村先生研究)

往還寺より笏木献上の願出 寛政十二年に一位山往還寺より、京都醍醐の理性院家司、吉田内匠に笏木献上の斡旋方を願出た。處が寺院からの笏木献進は許されないので中止された。

この時の願出に添へた由緒記(往還寺文書)に、

先祖内木修理亮藤原善綱が、往古、位山御見分の勅使大江氏下向の時、隨從して来て、位山の坂下と申す土地に居住を定め、子孫内木助左衛門と名乗り、代々笏木を献上してきたとある。又平治元年三月には内木助左衛門が使節となつて献上したとも記してある。

参考 享和元年七月二十日、過去帳の記

吉田内匠來狀、笏木献上の事、現在寺にては決して難成由にて志願止、右の返翰
同月二十七日認め、山口武平治に誂へつかはす。
(往還寺過去帳より)

文化文政頃の献上

安永七年梶原伊豆守家熊(後毛利氏)が信州から招かれて、水無神社の大宮司となつて程なく献進の事が行はれたらしいが、現在それを證明出来る記録等はまだ見出されてゐない。家熊は享和元年三月に



三條實起の歌

なくなつてゐる。

往還寺過去帳享和元年三月の記

前大宮司平朝臣家熊功秀彦神靈三月二十四日死、二十九日葬式

文化の頃家熊の子景直（肥後守）の時、笏獻進の事實があつたことは次の毛利家所藏の笏の歌によつてうかがはれる。

笏の歌

萬代も君に仕へて位山手にごる笏に袖ぞ正しき

三條實起

幅の裏

文化三丙寅明鏡に

前右大臣實起公

從一位前内大臣とあり

五十一齡

寶曆六丙子生

文化丙寅より今丙午に至て四十一年を經

三條實起公は寛政八年十二月内大臣に累進し、九年三月これを辭し、文化十一年四月右大臣に任せられ、隨身兵仗を賜つた。更に同年九月これを辭し、文政六年九月七日六十八歳で薨じた。

幅の裏の五十一歳の時は丁度文化三年に當つてゐる。

参考（國史大辭典・住還寺過去帳）

嘉永・安政度の献上

一宮水無神社より嘉永六年笏木を献上して、廣橋前大納言家へ御暇乞の節、御即位の際の御玉箱一つ、天子様平常御用遊ばされた御茶碗三つ頂戴したと傳へられてゐる。一宮寶物中に菊花御紋付御茶碗一つ、菊花御紋付御小皿二つ、嘉永年度御笏献上の節、御下賜品也と記載してある。これを考へると御即位に關係なくとも献上した事がわかる。

安政二年二月飛驒一宮大宮司大江景審より廣橋大納言家御内（藤堂兵庫權助、濱路阿波守）に「一昨年笏木を献上致しましたが、昨年安政元年四月京都炎上に依つて、猶一度御笏木を献上致し度い」と願上げた所、七月十八日附で再献上致してほしい旨仰せ出されて御笏木を献上してゐる。その折白銀三枚を安政二年十一月に頂戴した。現在一宮寶物中白銀二枚と別に小粒が七ヶ檀紙に包んで藏してあり、傳來に安政二年御笏木献上につき禁裡より御下賜品也と記されてある。

明治年度の献上

明治三年二月一宮大宮司から高山縣を経て、笏木献上を神祇官に願ひ出て、其の年の四月九日附で、伺ひの通り御採納の御達が高山縣廳宛に出てゐる。

同五月大宮司毛利茂から、宮村山内字位山つゞき大ぬくひ櫟木元木三本伐採の承認方を高山御役所に願ひ出た。

同年十一月十日御笏を白木櫃に納め人足二人に之を擔がせ三木七郎右衛門を宰領とし
て宮を發足した。十二月二日滞りなく獻上を終り、一同其月の二十九日に歸村した。

參考

1 御笏獻上に付櫛元代を請願す

奉願上候書付

宮村山内字位山つゞき大ぬくひ

一、櫛元木三本 但目通三尺廻

右は當社司より如先規御笏木獻上之儀に付、伺之通御下知被仰渡、難有仕合に奉存候依之書面之元木被下置候様奉願上候

明治三年午五月

誠恐誠惶

一宮大宮司 毛利 茂

高山御役所

(五月二十二日許可)

2 笏木獻上の爲一之宮大宮司上京す

奉願上候書付

一、白木櫃 一棹

一之宮大宮司

毛利 茂

此人足 二人

宰領

三木七次郎

外兩掛 一荷

僕

三木 藤七

右は今般私儀御笏木獻上として、來る十日御當地出立、上京仕候に付、書面之通御先觸並駄賃帳御印鑑共御下げ渡被下度奉願上候

以上

明治三年午十一月

一之宮大宮司

毛利 茂

驛邊掛御中

(十一月五日許可)

3 覺

飛騨一宮

毛利大宮司 上下三人

右者飛州位山御笏木獻上として明十日高山出立、中仙道通、東京迄罷出候條、於宿々書面の人足御定賃錢請取之無差支續立可被給候也

毛利大宮司内

庚午十一月九日

三木七次郎

4 獻上目錄

一、御笏木 但 板目 榎目 棗目 御箱入

一、御杖 一

一、皮革 御箱入 一

右之通獻上仕候 以上

(大野郡史)

大正年度の調進 大正四年七月一之宮水無神社大池宮司より、笏木献上の願出をしたが、由緒が不備で御採納に預る事が出来なかつた。然し大正天皇御大禮大嘗祭御用の笏として、故押上中將の奔走により、位山の一位の笏が、參列の皇族以下百官用として四百三十本を調進せられる事になつた。謹製の上供進の手續を経て、大正四年十月調進された。

選材 秋津 米吉
 製板 大野彦之丞
 工匠 津田 亮貞 田中 吉郎 淺井松之助 加藤 豊作 寺田 熊吉
 新名莊之助 今村伊三郎 小島 芳郎

又此の時千光寺からも奉祝の爲めに笏木を献上してゐる。
昭和度の御用御笏上納と献上 昭和の御大典に際し一之宮水無神社では、御大禮の都度恒例の獻進品としての御取扱を蒙り度いご願ひ出る事に決し六月大野岐阜縣知事が飛驒地方の初巡視に際して、史料の閲覽を願ひ、又今泉先生宮地博士の來飛を機として、その指導を請ひ昭和二年八月十日附で、御用御笏の献上

大嘗祭奉仕百官用の御笏上納を願ひ出た。翌三年百官用の分は御採納の御模様と拜聞したので、早速用材の選拔、伐採、木材の乾燥に着手し、五月一日大禮使から其の寸法と納入方について御沙汰書を正式に受けた。

材料	櫟 (榎目)
寸法	長 一尺三寸 幅 (上端 二寸三分 下端 一寸五分)
数量	厚 (上 三分 本 二分)
納期	百五十握
納入場所	昭和三年九月三十日 京都

これより先、宮村々長等村内の有志はこの御笏獻進に位山宮村々有林の一位樹を以て獻進したいと考へ、御採納の内報に接すると共に、昭和三年二月村會滿場一致で、御用材の伐採を決議し、昭和三年四月位山に分け入り、山口祭を執行し元木四本を伐採した。何れも位山屈指の材で優秀なものばかりであつた。

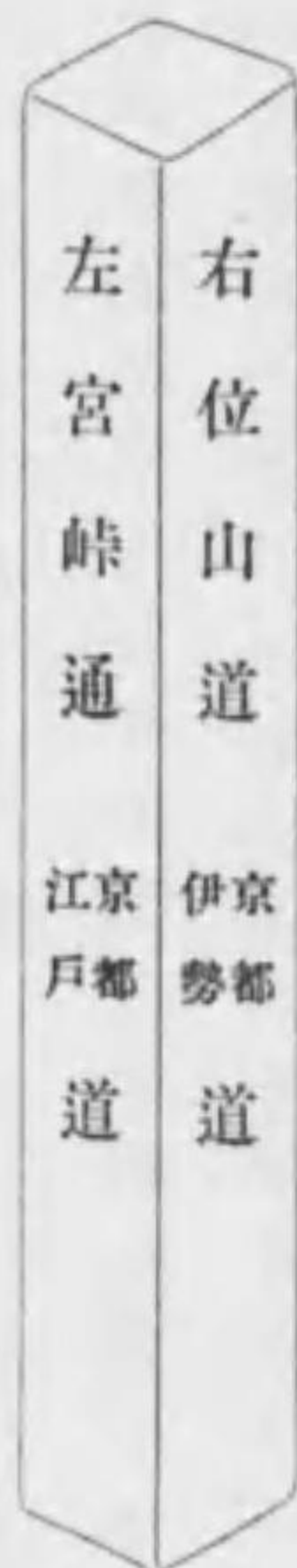
調製は協議の結果田中松祐齋主任となつて、他の同職の有志者之に助勢する事になり、九月十日より至誠を込めて松祐齋の工場で作業し、仕上調製は水無神社直會舎を假工場として齋戒沐浴して仕上作業を行ひ、遂に九月二十日之が調製竣成し奉告祭を執行された。九月二十五日例祭を期として、御笏上納奉告祭を社頭に奉仕し、同二十七日河合宮司之を捧持して、三木出仕を随へ、清水氏子惣代と同行三人上納の途に上り、二十八日正午近い頃豊田岐阜縣知事官房主事の先導で、無事二條離宮へ合計百五十握、一握の不合格品もなく目出度上納済となつたのである。次に、

天皇陛下へ献上の御笏は昭和三年八月十日付で、御即位禮奉祝の爲めと再び出願した處同年九月十四日付で御採納の御沙汰の傳達に接したので、豫て選擇して置いた御用材を以て、九月二十二・三兩日にかけて、田中松祐齋畢生の譽れと、齋戒沐浴して柁目杵目各一握宛を謹製し、清淨な裝飾袋に入れ、更に桐箱に納めて十一月二十日岐阜縣廳に持參し、其の傳獻を願つて献上されたのである。

(飛壇史型)

四、位山街道

位山街道の名は途中位山峠を越えるのに因る。此の位山街道は上古以來天正年間まで南美濃から飛驒中央に入る唯一の官道であつて、上呂淺水橋頭から益田川を渡つて尾崎に移り、山之口川に沿つて山之口村に達し、此處から位山峠を越へ、一位天然記念林を通り、段に出て、荊安峠を経て宮村へ出る街道で、この道程六里の間をいふ。今宮村郵便局前の道路分岐點に在る當時の道標には、



ごあり、他の二面に次の文が刻まれてゐる。

當一宮西數里嵯峨聳霄綠樹鬱葱者位山也即是州中第一之名巒而諸家所咏國風顯然于拾遺集以降世々撰集及家集等矣相傳古所出製笏料木故有位山之號也其大麓跨三邦有一條山路蓋往古官道也後開河内鄉險隘以通諸州也雖然益田河水充漲則不得通濟渡因踰位山路從山之口邦歷益田西道出濃州捷徑也

行人莫臨岐愆而有嘆□爾云。

萬延紀元歲次庚申秋九月

赤橋園主誌

早川豊廣立

天正年間には河内街道が出来たけれども、位山街道の方がやゝ里程が短いので、夏は涼しく出水などのため交通を杜される心配もなかつたので、明治の世まで相当利用されてゐた。

峠の辻は位山の頂上より約四百米低い處で、爰に彼の有名な長谷川郡代の建立した石碑がある。此の石碑は五尺六寸餘の高さで、碑面に「位山」の文字が刻まれて居り、碑後に享保萬年之第十三禩戊申九月十一日欽差吏長谷川庄五郎藤原忠崇立とある。石碑のほか、位山記念林・保護林等の掲示があつて、あたりは古木天を衝いて立ち幽邃な深山の趣がある。

戦國時代打續く戦亂のために道路が梗塞され、野武士・山賊などが旅人を脅したことも甚だしかつた。位山峠に追剝が出たと傳へられてゐるのは此の時代のことであらう。

金森氏領國の頃は太武（段）に位山路往還の驛亭があつた。現在問屋々敷といふ地所があつて、宅地の基礎が残つてゐるが、官道時代に驛舎のあつた名残であらう。

参考（妻太後風土記・飛驒史壇・飛州志・飛驒國中案内）

五、位山神社

明治元年二月四日、東山道鎮撫總督先發竹澤寛三郎が高山陣屋に到着、同七日陣屋前に、天朝御用所の高札を建て、同日、國境口留番所十七ヶ所へ高札三枚を建てさせ、又村々へ人民安堵すべきやう告諭書を發した。

竹澤寛三郎は三月十三日梅村速水と交代する迄、飛驒には僅か一ヶ月餘しか居なかつたが、此人は敬神勤王の志深く、自ら模範を示し、後世まで良い感化を與へてゐる。

大君の御爲ごならば野への上深山の苔ご成るもいとほし

寛三郎

二月二十九日には、位山に史内十八社を祀る神社を建設しようご考へて、家來中村富江等を遣して場所を見分させ、三月二日には、再び家來田口長門等を位山に遣はし、同日延喜式内外神社の廢絶したものが多かったので、大野郡位山に假に合祀の神社建設の布告を發し、御神体を備へて御祀した。

然し竹澤寛三郎はほどなく梅村速水と交代して飛驒を去つたため、その志をつぐものがなく、位山神社は廢れてしまつた。

市村林山明治二年日記

八月二十五日雨

山之口村位山に竹澤寛三郎殿、新規取建候、小社追々及被損候に付取計方、右村役人中出で申上候處、神体は當縣稻荷社へ引取、祠堂は朽腐させ申可き旨御下知にて其段申渡す。

参考 (神社を中心として見たる飛騨史及林山日記より)

宮村問坂の古老(八十歳以上)小野老人は言ふ。「十五、六歳の頃だつたらうか、竹澤寛三郎様御取建の神社が位山に運ばれた事を記憶してゐる。この社は三つあつて、其の中一つは位山峠の辻邊りにあつた。又その大きさは普通家々の神棚やうの祠堂で餘り大きいものではなかつた。」と。

六、位山の牧場とスキー場

位山牧場 明治三十九年十月創設されたもので、明治三十七、八年戦役の記念として、刈安太奈山につくられ、その面積は百四十町三段二畝六歩である。

宮村は大野郡では久々野につぐ馬産地で、一村競つて馬の飼育が盛である。昭和九年本縣の補助を得てこの牧場の大擴張並びに大改良を施した。

位山スキー場

位山スキー場は位山のなだらかな傾斜面を利用したもので、本村は昭和九年位山口スキー場、位山刈安スキー場、位山スキー場の三ヶ所を設定した。

これらのスキー場は位山の麓から登る傾斜面中にあつて、全部が一続きのスロープになつており、初心者にも玄人にも格向なスキー場である。

高山驛から宮驛へ十一分、驛前からは刈安スキー場まで約五キロ刈安林道が通じてゐる。刈安スキー場にはモダンなヒュッテがあり、裕に六、七十名を収容することができ、スキー場の眺望は非常によく、御嶽乗鞍、槍ヶ岳等の日本アルプス連峯は一眸である。又ここから久々野、船山スキー場へ行くこともできる。位山の靈氣にひたり乍ら、銀白の處女雪を蹴つて、太古の山、位山の峯をかけるのは實に壯快の極である。



刈安スキー場ヒュッテ

七、位山登山並に巨石文化遺蹟

宮村口から位山に登るには、刈安峠から牧場道を行くのと、往還寺南門から刈安スキー場に至り之を登つて緩かな尾根道を行くのと、宮川に沿ふ林道により発電所に至り（自動車通ずる）其の附近から山徑に入つて岩たけ道を登るの三道あるが、就中牧場道を行くのが比較的容易であり、目下施行中の位山林道が完成すれば刈安平までは自動車も通じ一層便利である。飛驒一之宮から平坦な大道を南西に行くこと約二十町で往還寺に達する。これより刈安峠を登りきると海拔八百八十五米の高所に刈安平が展



開する。此處に設けてあるヒウツテに休息して爽かな山の氣を吸ひ、静かな廣原の精を感ずる時、身は先づ仙境に入つた心持がする。此の平の入口に於て本街道に分れて西に入る緩かな上りの牧場道を進み、道々眼界に開けるところ霧の海に浮ぶ山島の妙趣を賞しながら、山肩近くなるに随ひ美しい白樺林を縫うて登り、俗に尻立てと稱する此の山の肩に至る。海拔凡そ千三百三十米のところで、近く船山に對し、東北方の山系盆地を一時の裡に収め、殊に陽光に輝く高山市街を俯瞰する美しさは實に名狀しがたい。それより生ひ茂る熊笹の中に刈り通した山徑を辿ると、道傍には處々に巨巖が蹲り、古木が立ち、熊笹の間には深山しきみしやくなげいぬつけみやましやうぎうるつけ等常緑小灌木が色彩を添へ、地上には深山ひかげのかづら類が通つてゐる。山頂は平潤な熊笹原で、背の低い老樞が點々立つてゐる。巨岩の下、老樹の陰などにつるつげが赤い實をつけてゐるのがこよなく愛らしい。背丈よりも高く生茂つた熊笹の中に刈通した徑を進むと、一五二九米標高石のある處に達する。附近の岩上に立つて四方を展望する時、既に身の俗界にあることを忘れてしまふ。

打續く山波の遙か彼方には神の姿さながらに雄大な御嶽と端麗な乗鞍嶽とが相對して、天空高く聳え、裳裾を遠く信飛の間に展げて立ち、乗鞍嶽の北に連る北日本アルプスの峻

峯が連つて天空を劃し、北西には白山連峯が繞り立ち、西南には近く友峰川上嶽が聳えてゐる。俯瞰する飛驒高原の山波の間には久々野高山大八賀丹生川の谷や盆地をはじめ、遙か南には萩原附近の谷を望むことが出来る。彼の位山高天原御座所説も此の山の靈氣に浸つて始めて無條件に領かれる。

標高石附近に東面する高さ一間内外の巨石三個と、立山に向ふ巨石一個とがあるが、同じ山頂でそれより三町餘北のところに道側に四個の巨巖があり、北より第一の岩は東面し高さ六尺、東面の副十四尺、第二の岩は之に隣つて北面し、

(水無神社) 地上一丈餘北面の幅十二尺、此の兩岩の間には切面の長徑三尺五寸短徑三尺長さ十三尺の圓壘形の大石柱が横はり、之と第二の岩との間に敷石九個ばかりならべた石室様の空所がある。第三の岩は高さ五尺幅北面で十三尺あり、第二の岩に倚り掛つて其下には十數個の敷石のある石室様の空所がある。第四の岩は之より數間西に離れて略方形で高さ五尺幅十五尺北面上部には庇形の比較的規



石巨上頂

則正しい缺壞がある。何れも石英斑岩であるから、自然の節理に従つたものであるかも知れないが、之等が皆完全な一壁面を有して而もそれが東面(乗鞍嶽)或は北面(水無神社)し、

且つ其の配置も一種の統整があるやうに思はれる。

尙稍下つて標高千四百米邊には高さ二間餘の立石が三個あつて、二個は東面し中位の一個は北面してゐる。其他には處々に一系統中に統整されてゐるのではないかと思はれる巨岩がある。

歸路を尾根道によると前記の尻立てへ下りて、方向を北にかへ、いぬつけとみやまひかけのかづらが赤土の山肌に美しく茂つてゐる庭園風の原を下つて牧場柵のところまで牧場道に分れ、尾根を緩かに下つて刈安スキー場の上に出て、刈安平を目當に巨岩の累々たるサコ路を下ると、海拔千五十米邊に祭壇に使用したかと思はれるやうな方形三段の巨岩がある。石英斑岩の節理によつて出來たのであるが、あだかも地圖上頂上と神樂岡(水無神社御座所)とを結ぶ直線の畧々中央にあつて、祭壇に用ひられたのではないかとも思



室石上頂

はれる。

位山は高天原の御座所であるとし、水無神社宮殿を天之岩戸（天齋殿）にあて、水無河原を天之安河原にあて、神樂岡を（天宇受賣命）奏樂の遺蹟に推定する學者もあり、又神樂岡で神代から奏樂神事が行はれたことや、七灘等の傳説も此の地にあるのであつて、天皇の位の山と仰がれ、御即位の御笏の料にあてられた一位を産することによつて有名である位山は、更に神代に遡る巨石文化遺蹟としても今後大いに調査研究すべき所である。

此處から東に向つて下り、途中小徑を北方にとつて溪川に沿うて下ると往還寺の南門に着く。

位山は高山より一日の行程として容易に而も女、子供でも登ることが出来て、靈山の神秘に觸れ且つ浩然の氣を養ふことの出来る絶好の山嶽である。

八、位山の傳説

神樂山（位山を指す）の神代傳説 神代の昔飛驒に惡鬼横行し人民を苦しめた事があつた。天照大神は大己貴命に御寶の五十金鈴の内、陰陽の鈴を御與へになり、惡鬼退治の爲飛驒の神樂山にお降しになつた。命は此靈鈴の御力に依つて難なく惡鬼共を御平げになる

事が出来た。今でも鬼川原の名や、久々野（角竹註末長く安穩になつた意味）の名が見える。かゝる目出度い山であるから、後天智天皇の御代には宮殿の用材を此山から御召になり、神樂山は位山と呼ぶ様になつた。因に今の水無神社の御旅所をも古くから神樂山と呼んでゐる。此れは安永七年の梶原伊豆守の文書にも見え、神代遺蹟だと書いて居る。位山とは離れる事の出来ない關係があるらしい。位山頂上の神靈に對する祭祀場で有つたらうとする考も敢て無理ではあるまい。

（飛州志雜記）

両面宿儺菩薩御笏木獻上 仁徳天皇癸六月朔日午の刻、斐太國大野郡小八賀の郷出羽ヶ平の山上に大鳴動があつて、數千丈の岩壁一度に崩れ忽ち數丈の岩窟が出来たといふ。その窟の中から長一丈八尺、一体兩面、四手兩脚、身には甲冑を着して、兵杖を帯び、二手には斧を持ち、一方の二手に印を結んで宿儺といふ化相の者が忽然として現れた。是が即ち救世觀音の化身であつた。

此の時野良へ出て働いてゐた村人達は、非常に恐怖し、忽ち遠境に逃げ散つた。その時宿儺、「汝等全く恐怖すること勿れ、我は之佛法守護王法一大事の契約に依つて、今此世に出現せり。村里に供奉すべし。」といへば、金田左近太郎善久と言ふ者が、唯一人踏止り、十一面觀世音大士の小身に再化した宿儺を背負ひ、日面村の柴の庵に供奉したのであつた。

ところが一夜の中に忿怒降魔の形を現し、丈餘一頭の両面となつた。たま／＼、飛驒に鬼神が現れたといふ事が普く天下に流布し、叡聞にまで達したので、鬼神退治として官軍が美濃に發足した。然し飛驒の國は深山幽谷、道たえ、橋も危くて、攻入るここが出来ず、空しく歸つてしまつた。そこで、また協議あつて、雄仁親王に出陣の命が下り、美濃高澤といふ所に陣を張られた。此時、兩面宿儺大菩薩は、出羽ヶ平を出て、大野郡久々野郷宮村の山上に登つて、美濃國高澤の陣中へ牒狀を立てた。

「我は之靈山會場護法の神なり。往昔於靈山釋迦説法の會坐、仁徳宿儺共に警固を爲したり。時に佛の曰く仁徳は末代正しく日本の王位に生れて我が法を普く日本に弘むべし、其時宿儺共に出て帝國即位の大事を傳授し、惡神魔軍を退治共に佛法の地となすべしとの佛勅あり。然るに先帝崩御の後、聖徳の道を重んじ兄弟互に位を譲り合ふ事既に三年に及べり、然る間天下空位にして萬民悲しみ、國土嘆く、此時に當つて出現せり、雄仁も往昔靈山喜念の因縁あるが故に勅を蒙れり、速に此地に赴くべし」と。そこで官軍の大將雄仁親王を當飛驒國宮村の山上に招いて、王法即位の大事を傳授せられた。この時此の山の櫟の木を以て御笏の木を作り捧げ奉つたのである。

雄仁親王は帝都に上つて叡聞に達し、仁徳天皇寶算二十四歳で御即位あらせられた。ここに於て、此の山に位山の勅號を賜ひ、櫟の木に一位の贈官があつたといふ。

(日本アルプス第四十六號信濃路・善久寺記録・飛驒國中案内)

黃草池の大蛇 位山の尾は東北になだらかに下つて、裾は太奈山となり、其の鞍部に標高六百八十五米の刈安峠がある。これは位山峠に續き飛驒の最も古い官道で、今の宮峠の街道などはすつと後に出来たものである。此の刈安峠の上に昔大きな池があつた。今では全く乾せ上つて處々に水苔が生じ、菅・小松などが生えてゐるが、一帯に濕潤な澤地である。澤は南北約三百米、東西二百米程のもので、昔は滿々として水をたゞへて居たと言ふ。

いつの頃か此の池に大蛇が棲んでゐたが、或時其大蛇が池から脱け出て來ると言ふ噂が立つた。村人は大いに驚き且歎いて相寄り、相談をした所、一人の古老が言ふのは、「總じて此の大蛇と言ふものは、鐵氣かねけのものが嫌ひであるといふ事を聞いてゐる。今刈安の大蛇が宮川の方へ脱けて來ては村は亡びてしまふに違ひないから、これは何でも一つ村中の鐵類を集めて、こちらの方の涯にうめ立てやうではないか」と、申したので、早速村中にふれを出して、古い鐵・鎌・備中鍋・釜の類までも聚めて、池の北涯にひそかに埋めて置いた

其後或年天地忽ちにくらくなり、山が鳴り池の主である大蛇が顯出し、南涯を毀ち無數河より阿多野川へ脱け出て去つたと言ふ。今も荊安峠の南崖に蛇抜けと稱する所がある。愛寶山の紫雲 三代實錄に言ふ。清和天皇の御代貞觀十五年二月、飛驒國言として、大野郡愛寶山に、貞觀十三年十一月十八日、十四年十一月十三日、今日十五日、三度紫雲を見らるゝとある。愛寶山を安房山と言ふ人もあるが、これは位山の舊名だと言はれ、往古は朝日高根、久々野一帯を阿拜郷と稱したところもある。

この紫雲の紫色は殊に貴い色としてあり、歌の道では此上ない色となされてゐる。目出度い紫雲を三年も續けて見た事から、是より位山と言ひはやしたとも言ふ。

濃紫たな引雲をしるべにて位の山の峰を尋ねん (拾遺集)

清原元輔

(参考) 斐太後風記・大野郡史

長者屋舗 位山峠を無數河川に沿つて下ると、一里餘りのところに長者屋舗と稱する地跡がある。此處は、無數河の二軒家附近の山中で、地形の構へ、石の配置等何さまその昔廣大な屋舗庭園のあつたらしい感じのする處であり、その地續きに、桃・梨等の大木がある。口碑には昔京家の方で高貴の人が住まはれた土地であると言つてゐるが、何の記録もなく由來未詳である。

九、位山と文學

位山の詩

位山	尾張	森	春	濤
茫矣當年舊納言	故侯城址亦無存			
千秋只仰氤氳氣	雲表青山一品尊			
姉小路中納言嘗退居于此故及 (高山竹枝)				
位山暮雪	淨勝寺	醒	齊	道元
位山自古多題詠	何況漫天暮雪奇			
遺愛千年人不見	驛嶺依舊北風吹			(飛州志)
位山暮雪	白	靖	齊	
散亂同雲起	位山晚望寬	一	天	銀屑湧
萬古玉樓寒	鄭紫吟相得	震	安	臥不干
何人拙秋思	旨酒極娛歡			(飛州志)
位山暮雪	祖	昂		
萬里寒天好任地	位山暮雪興猶多			

縱然到此吟藤六

爭似初當爲繼歌

(飛州志)

遊宮村山中詩

棧畔悲風夕日沈
宮村雨過叢祠暗
夜宿僧房丹洞口
遊蹤處處名山遍

松杉一徑有猿吟
位嶺雲封斷碣深
朝探石耳綠溪陰
且逐漁樵擬向禽

(臥牛山人集卷四)

玉笏詩呈

押上將軍

柏木 萬

宮嶺南去路

位山高擎天

叢生是樸樹

願望鬱蒼然

聞昔婦國主

製笏獻御前

天子乃嘉納

愛撫玉座邊

爾來七百載

風雨感空牽

太平聖天子

晚秋茲受禪

將軍姓押上

忠誠駕古賢

請官得允許

伐採木質堅

新居淨一室

工人斧手研

嗚呼盛典日

玉笏照闕鮮

(飛驒史壇)

一位木歌

桐山霧山

一位之山靈赫然

維神生木稱一位

位山の俳句・民謡

俳句 位山

聞説上古聖明朝	用之爲笏典章備
乃知逐歲貢獻來	物換星移失傳記
文龜國司再振興	雪玉集中載其事
元和二年後繼之	天顏有喜見詔意
下命椒房賜褒書	于今藏在千光寺
靈山靈木天下驚	宿學紛々末定議
言林言櫟言小松	強取漢字呼品類
我國自有我邦音	一位須書一位字

一くらひ位山なり今日の月
御所柿の名にこそ残れ位山
さかり日の西くれなるや位山
露草の延たつ足やくらら山
秋の田をいさ見下さん位山
高山のこなたや月の位山

魯 九 川 椎 通 山 寂
魯 九 川 椎 通 山 寂

位山こゝらや小豆大納言
秋すゞし扇は笏のくらゐ山
金屏の砂コヤ雪のくらゐ山
遅櫻山の山またくらゐやま
一こゑに其位山ほとゝぎす

位山暮雪

夕風や雪をのぞみん位山
此ゆふべ雪や九重くらゐ山
遠目にはこだかし雪の位山
くらひ山と雪にはいかで夕時雨
一くらひ山の景ます雪の暮

位山暮雪

くれの雪や山近ふ成遠ふなり
今朝は雪の初冠して九良居山
蝶々やすそからもとる位山

位山

曇いろにあくむ霞や位山
名月やふけて定まるくらゐ山
さくらさへ麓において位山
霧一重かけて興あり位山
位山たゝ何となく風かほる
鶯や下手に啼いても位山
錦着て千とせの秋や位山

位山

小車も花をかさるや位山
久方の月やすみ昇る位山
麥の埃り離てたかくし位山
春草やもてなす花の位山
伊勢袖もいたゝけ雪の位山
人里は霞に遠しくらゐ山

獨 下
江 鶴
斧 山
江 鶴
卯 醒
(飛騨史境久羅井山)

昌 程
了 心
立 圃
康 吉
我 咲
(飛州志)

松任千代尼
游 魚
千 代

(千代尼句集、大野郡史上)

至 芳
冬 涉
麻 文
烏 角
芳 斗
土 龍
李 仁
(飛騨枕發句集抄、水無神社略誌)

黒 華
直 生
玉 斧
良 恭
涼 水
午 有

雛の日や見あけるかたも位山
ゆずり葉も千代へる陰や位山
位山蟬もくるまのきしる音

倚南
竹母
滄洲

(飛驒枕句集、飛驒遺乗合符)

民謠

位山雲を敷寝に 添寝のすがた 見やれ船山くらゐ山

(飛驒風物記)

大正天皇御結婚奉祝歌

奉祝歌

岡村御蔭作歌

第一

仰くも高き大君の 位の山の小松原 淺せぬ縁を千代かけて 祝ふ今日こそ愛たけれ

第二

恵も廣き大妃の 位の山の藤の花 たなびく雲の紫に 匂ふ色こそ愛たけれ

(新飛州)

宮小學校校歌

(一)

飛驒の國內の一之宮

水無の神もましまして
我が天皇の位山

長く此處に仰ぐなり
(二)

水上清き宮川は
夜晝流れ怠らず
自然の靈地に育てられ
幸ある我等は勵みなん

作曲 河野信一
作歌 富田豊彦

位山の和歌

位山おのが春しる鶯や 高きにうつる初音なるらむ
位山さかちもやすく昇りけむ 雪の光のあきらけき世を
紫の雲をかさねて上もなき 位の山の名にや立けむ
こ紫匂へる色をくらゐ山 あふくも高き雲の上人
位山むすほほれつる谷水は この春風にとけにけらしな

大 大 禮 禮 清
秀 秀 彦 彦 輔

(勅撰集)
四一

位山春待ちえたる谷水の 解くる心は汲みて知らなむ
 道しある代々の昔の位山 みは上ながら猶まよふかな
 心ゆくほどこそ登れ位山 名高き秋の月のしるべに
 位山登りてきけば久方の 空にかたらふ杜鵑かな
 紫のはつもとゆひを結ぶより 君が位の山をしそ思ふ
 濃紫たな引雲をしるべにて くらゐの山の峯を尋ねん
 猶さそへ位の山のよぶこ鳥 昔のあとの絶えぬ程をば
 よそにても聞そうれしき位山 高きにうつる鶯のこゑ
 位山いはねに生ぶる玉椿 八千代のかけは君のみそ見む
 さきそむる位の山の菊の花 こき紫に色ぞうつらふ
 位山かさなる雪に跡とめて 迷はぬ道はなほぞかしこき
 道しあらば今も迷はで位山 昔の跡に名をのこさばや
 老の身に今ひと坂の位山 登らぬにても苦しかりけり
 今更にのほりぞやらぬ位山 苦しかるべき代々のあとかは
 老の身は登るもつらき位山 麓の里ぞ住みよかりける
 玉鉾の道ある御代の位山 ふもとに一人猶迷ふらむ
 千世ふべき君が行幸に位山 又分のぼるみねの椎柴

隆 信 (勅撰集)
 後土御門天皇 (紅塵灰集)
 公 明 (續後拾遺集)
 常 陸 (堀次集)
 元 輔 (拾遺集)
 俊 成 (千五百集)
 三條入道右大臣 (夫木集)
 讀人しらず (夫木集)
 定 家 卿 (家集)
 爲 繼 (風雅集)
 秀 綱 (風雅集)
 實 教 (風雅集)
 爲 定 (風雅集)
 水戸黄門光房卿
 教 良 (續千載集)
 祐 親 (續千載集)

我が君の位の山し高ければ 仰がぬ人はあらじと思ふ
 明らけき御世ぞ知らるゝ位山 また上もなく仰ぐひかりに
 位山身は下ながら影見れば 登らぬ峰に月ぞさやけき
 すめらぎの位の山の小松原 今年や千代のはしめ成らん
 位山かくてかはらぬ峯の松 今一しほの春をしらせよ
 なき路に猶立ちのぼる位山 ありてきくよと思はましかば
 我が君の位の山し高ければ 空にきこゆる萬世のこゑ
 位山峯までつける杖なれば 今萬代の坂のためなり
 位山ふもとばかりの道をだに 猶わけがたくかゝる白雲
 位山あるにまかする道なれど 今一坂ぞさすがるしき
 登るべき道はのぼりぬ位山 これより上の道ぞゆかしき
 人はみな越ぬる跡の位山 をくれてだにも登りかねつゝ
 位山今いく坂を登りてか 雲の上なる月を見るべき
 位山登りはてゝも峰に生る 松に心を猶のこすかな
 位山おごろの道のほど遠し 花の外なる峰の椎柴
 位山まよはぬ人のあと見ても 今一さかを猶おもふかな
 位山登りもやらで急がれぬ 五十町の坂を越えむとすらむ

忠 通 (續千載集)
 女藏人萬代 (續千載集)
 能 清 (續千載集)
 中務卿親王 (續古今集)
 顯 氏
 雅 有 (續千載集)
 忠 通 (續千載集)
 能 宜 (拾遺集)
 隆 祐 (續拾遺集)
 爲 完 (新後拾遺集)
 政 村 (新後拾遺集)
 完 宗 (新後拾遺集)
 基 氏 (新千載集)
 六條内大臣
 資 明 (新拾遺集)
 言 經 (新千載集)
 公 隆 (新千載集)

いとどしく老の坂そふ位山 くるしき道と登りかねつゝ
 争で我れ位の山に庵しめて 登り果てなば身を隠さまし
 位山そのしなことにあがりしや 憂しと思はぬ昔なるらむ
 歸るべき道しなければ位山 のぼるを見てもぬる袖かな
 位山雪に迷へる老が身は 今一坂を争でいかのぼらん
 位山峰近きまで我こえし 道をば君が手にとりてみよ
 一坂は越えのこしてん位山 老ひては進む道もくるしき
 老の坂おぼつかなきも位山 こえむや安き門出なるらむ
 老の坂のぼりて越えん位山 まづめぐみある道のかしこき
 なほのぼれ路はなくとも位山 おどろの道も君はなづまじ
 ふかき海たかきやありし位山 代々にこへける君が恵みは
 いく坂もまた越えのこす位山 のぼらん事も命なりける
 のぼれなを位の山にいや高く 生にける木のおなし名までも
 ことの葉をしをりとはして位山 生にける木の名にのぼらん
 位山花を待こそ久しけれ 春のみやこに年をへしかご
 のぼるべき道にぞ迷ふ位山 これより奥のしるべなければ
 今宵しも光そへける位山 かひある秋の月を見るかな

爲 定 (新千載集)
 基 成 (新千載集)
 後光明昭院 (新千載集)
 義 詮 (新千載集)
 基 綱 (細江漁夫)(飛驒八所和歌)
 實 陸 (雪玉集)
 基 綱 (雪玉集)
 基 綱 (雪玉集)
 濟 繼 (碧玉集)
 宣 長 (碧玉集)
 光 廣 (碧玉集)
 讀人不知
 正親町前大納言
 實 守 (千載集)
 倫 圓 (千載集)
 前關白左大臣近衛 (新拾遺集)

位山登る我身のいかなれば 雲居の月に遠ざかるらん
 幾世しも隔てぬものを位山 登りし跡になどまよふらん
 齡こそいつよをこえめ位山 たえにし跡にまた登るかな
 のぼるべき道を思へば位山 まだ籠なる我が身なりけり
 祈りてし君が恵に位やま 代々にも越えてのぼりぬるかな
 位山あとは昔にかへれども 歸らぬ道ぞ今もかなしき
 位山たかねの松もあるものを 籠も知らぬ谷のうもれ木
 位山みねなる人をふもとは わがみ吉野の奥よりぞ知る
 いつか我もとの佛の位山 まよへる雲の峰にかへらん
 位山みねの若葉の緑さへ あけにうつらふ秋をこそ待て
 位山くちにだに入りたらで かくながらこそくちなしの袖
 しは人の仰ぐも高き位山 ふみ見ざりせばいかで登らし
 位山進むはかたき人のよに 安くも登る月のかげかな
 位山高き短きほどくゝに 木々さへ品はある世なりけり
 天つ空おふへる雲は位山 さかゆく人のそでかとぞ見る
 こそ系吹く嵐も高き位山 榎原が下にかかるしら雲
 位山いづれの年の行幸より 今もふりせぬ名には立けむ

高 範 (新拾遺集)
 實 教 (新拾遺集)
 雅 孝 (新拾遺集)
 兼 宗 (新續古今集)
 有 世 (新續古今集)
 義 速 (新續古今集)
 東 廣 (名所集)
 長 流 (名所集)
 契 沖 (名所集)
 千 隆 (名所集)
 千 隆 (名所集)
 嵩 蹊 (名所集)
 千 浪 (近名集)
 彦 廣 (近名集)
 雄 風 (近名集)
 堯 惠法師 (北國紀行)
 山本春正 (飛驒紀行)

位山浮世にたずは下るとも 獅子の座にゐる身とも成ららん
 位山高く残れる雪の上に 春の光はこがれもなし
 箸ながら霞いろどる位山 麓に匂ふつほみのこして
 位山高き梢にさへかへり ゆき降る後の春ぞ久しき
 春なほかすみの上にいや高し 位の山にふれる白雪
 位山かすみへだてゝ九重の 花とも華にふれる淡雪
 春きては位の山のしら雪も 雲井にさける花かとぞ見る
 春くれば色をあらさう位山 ふもとの櫻みねのしら雪
 位山なほ峰高く登りつつ ゆたかに老の坂は越るを
 位山登らぬ身にも手にとりて もの食ふ箸ぞうれしかりける
 位山背面の里も春のきて 霞の衣たちはおくれず
 位山みんと思へばいさぎよし 登らんと思ふ門出ならねど
 位山見るにつけても思ふかな 登れば下る今の世のさま
 くらゐ山麓路ちかく來ぬれども 登らじ下る事のうければ
 冠山かしらはけたる様みえて 位のやまにはるはつ雪
 くらゐ山青葉にかかる白雪は 小忌衣きしこちこそすれ
 位山こへて程なく別るとも 吹きだに通へ伊勢の神かぜ

慈 園 (名所小鏡)
 定 惠 (一ノ宮八所詠歌)
 覺 映 (一ノ宮八所詠歌)
 雅 那 (一ノ宮八所詠歌)
 成 孝 (一ノ宮八所詠歌)
 通 古 (一ノ宮八所詠歌)
 房 常 (一ノ宮八所詠歌)
 家 熊 (一ノ宮八所詠歌)
 山崎弘泰 (天保十二年)
 蒲 八十村
 蒲 八十村
 弘 綱 (位山日記)
 弘 綱 (位山日記)
 弘 綱 (位山日記)
 弘 綱 (位山日記)
 弘 綱 (位山日記)
 室 美 濟 (位山日記)
 弘 綱 (位山日記)
 山崎弓雄 (位山日記)
 弘 綱 (位山日記)
 野瀬道任 (位山日記)
 弘 綱 (位山日記)
 弘 綱 (位山日記)
 弘 綱 (位山日記)
 弘 綱 (位山日記)
 船坂眞掛 (位山日記)
 照憲皇太后 (位山日記)
 大坪二市 (位山日記)
 福羽美靜 (位山日記)

たび衣いつしかなれて位山 越へて歸らんそらもなきかな
 ゆく人はいかに聞くらん位山 またも逢はんと松風のこと
 位山我を朝ゆふ待ときかば 年をへずしてまたも越まし
 立わかれ位の山は越えぬとも 我すむ里を思ひおこせよ
 古里の鈴鹿によしや歸るとも 位の山をいかで忘れん
 高山は位の山し近ければ 人の心もみやびたりけり
 便あらば告をこせてよ位山 ふみのながらも今はなれりと
 位山ふみの半ばは早なりぬ なしをへにきと今やつてん
 位山麓の里を忘れずば をちかへりなげもと杜鵑
 神さぶる宮居尊しきしなみの 位の山をしめのうちにて
 位山おい木のひまにほのみえて 水無瀬のやしろ神さびにけり
 神さびて尊くもあるか位山 麓に高き千木のかたそぎ
 登るべきよしこそなけれ位山 麓の里をいかで忘れん
 雲鳥の綾にかしこき大君の 位の山を見ればたふとし
 天つ日の光をうけて位山 身のほどくゝに登る御代かな
 名におひし位の山に鞍ヶ嶽 高山はみな闇とこそなれ
 位山みねも麓もとよむなり 春を待ちえし喜びのこゑ

弘 綱 (位山日記)
 中村三千年 (位山日記)
 弘 綱 (位山日記)
 室 美 濟 (位山日記)
 弘 綱 (位山日記)
 山崎弓雄 (位山日記)
 弘 綱 (位山日記)
 野瀬道任 (位山日記)
 弘 綱 (位山日記)
 弘 綱 (位山日記)
 弘 綱 (位山日記)
 弘 綱 (位山日記)
 船坂眞掛 (位山日記)
 照憲皇太后 (位山日記)
 大坪二市 (位山日記)
 福羽美靜 (位山日記)

356
830

ちはやふる神の御國の位山 いよ／＼高くなれる御代かな
 秋ふかき霧の絶間にあらはれて 檜原おぐらき位山かな
 世の中に山てふ山は多けれど 位の山にしく山ぞなき
 位山ちとせの坂を踏ならし 雲井にのぼる望月のこま
 夕附月仰げば高き位山 くるるもわかぬゆきの白妙
 仰ぎ見る天津日嗣の位山 その末末も雲井はるかに
 位山さかゆき越えて後にこそ 安くは道に思ひいりしか
 位山まだ椎柴のかけに居て 我が登るべき道は急がず
 萬代も君につかへて位山 手に取る笏に袖ぞ正しき

藤原道子 (歴代御詠集)
 桐山如松 (文化年間)
 桐山如松 (文化年間)
 押上美香 (慶應元年)
 (飛州志)
 藤原兼香 (飛驒神風)
 三條入道左大臣 (續拾遺集)
 爲邦 (新拾遺集)
 實起

昭和十年十一月十日印刷
 昭和十年十一月二十日發行
 編輯兼發行者 大野郡宮宮小學校
 岐阜縣大野郡高山町大字三町九七九番地
 印刷人 住 廣 造
 岐阜縣大野郡高山町大字三町九七九番地
 印刷所 斐太中央印刷所

非賣品

終

